

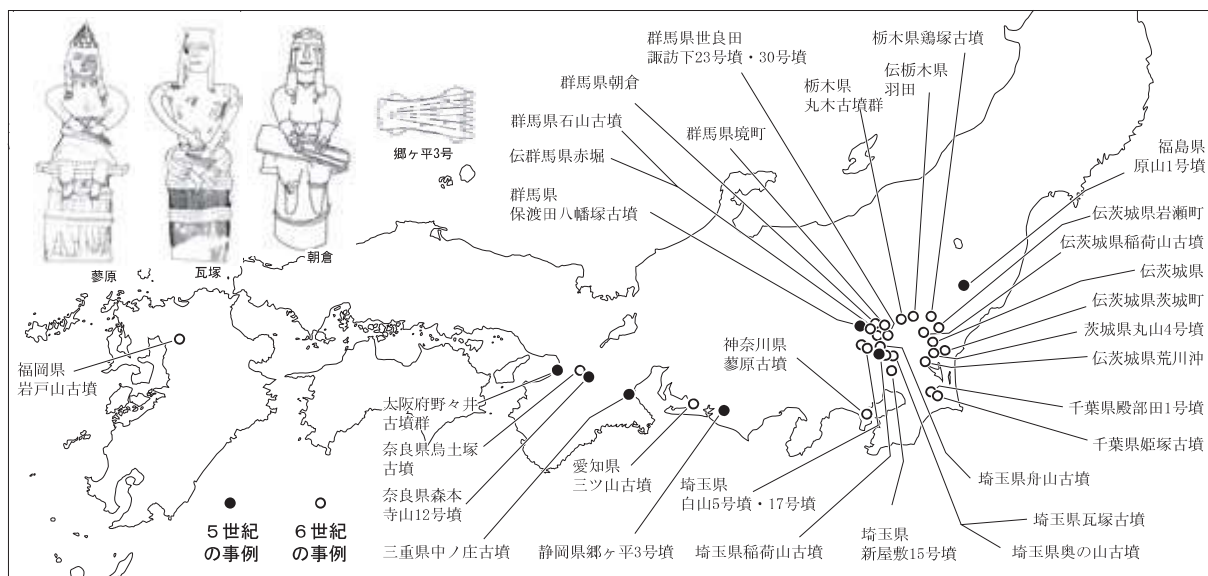


Fig.75 弾琴人物埴輪の分布

事例は在来的な尾張型埴輪との関連が強く、底部にかかわる技法のみが伝播した可能性がある。

Ⅱ類の系譜 三遠地域における淡輪系埴輪Ⅱ類が登場するに到った情報の源淵地は、淡輪技法の関連地である淡輪・紀ノ川下流域に限定できない。湖西窯で焼成された須恵器が陶邑系であることを考慮すると、淡輪系埴輪Ⅱ類の製作工人たちも畿内の河内や和泉などからの影響を色濃く受けていると想定した方がよいだろう。また、形象埴輪にみる畿内からの情報伝播は、同時期に類似した技法や表現がみられる伊勢地域の様相（穂積 2001）も視野に入れて検討を進めるべきである。

いっぽう、5世紀後葉における形象埴輪の拡散は関東地域にも大きく影響が及んでおり、淡輪系埴輪の系譜を明確する作業は、畿内から東国への埴輪祭祀や技術の拡散を知る上でも重要性が高い。とくに、郷ヶ平3号墳で確認された弾琴人物埴輪は、当地域の淡輪系埴輪の展開を埴輪祭祀の全国的な推移の中に位置づける上で、重要な示唆を与えるものとなった。弾琴人物埴輪は6世紀の関東地方において流行するが、5世紀代の事例の分布状況から、その源流は畿内にあるとみてよいだろう。弾琴人物埴輪は5世紀後葉における大王墓の形象埴輪群の中核に用いられている可能性があり、東海における事例は、当該期の畿内と関東の間の空白を埋める要素として注目できる。

（5）結 語

三遠地域における淡輪系埴輪Ⅱ類は、高い斉一性をもつことを特徴とする。技法の変異幅が少ないことから考えると、その製作者は限定的とみなせる。主要な存続期間は30～40年ほどで、この間に前方後円墳を中心に20基程度 of 古墳築造に関与したとみられる。1～2年ごとに新たな古墳造営に携わる計算であり、埴輪製作を専門的に行う工人集団が組織されていたと考えてよい。高い斉一性は、埴輪製作にかかわる特殊技能が地域内に拡散しなかったことを示すとともに、当地域では埴輪生産が特殊な分野であったことを物語る。遠江では6世紀前半において、埴輪の技術系統が淡輪系から尾張系に変化することをふまえると（鈴木敏 2001）、工人たちの世代交代によって淡輪系埴輪がもつ技術系譜の多くが途絶えたと評価できるだろう。（鈴木）

2 郷ヶ平古墳群の形成過程とその特質

(1) はじめに

郷ヶ平古墳群の調査成果によって、遠江における5世紀後葉の埴輪をもつ小首長墓の実態が明確になった。埴輪の様相にとどまらず、前方後円墳と円墳が組み合う古墳群の構造、特徴的な周溝形態や周溝周辺における祭祀の痕跡、葺石の不採用など古墳の外部施設にかかわる情報も合わせて得られた意義は大きい。ここでは、近隣地域の事例をふまえ、調査から得られた情報を解きほぐし、郷ヶ平古墳群築造の歴史的背景と被葬者像について触れておきたい。

(2) 遠江における初期群集墳の特質

前方後円墳と円墳 近年、淡輪系埴輪をもつ古墳の調査事例が増加し、5世紀後半を中心とする首長墓の実態が明確になっている。その多くは単独に立地するものではなく、周りに中小古墳を従え古墳群を形成している。その中心は、前方後円墳と円墳の組合せである (Fig.76)。前方後円墳と円墳の組合せは全国的にも多く知られ、日本列島の広範にみられる首長階層の集団構造を示す基本単位とみなせる。こうしたあり方は、遠江においても松林山古墳・高根山古墳の事例に認められ (鈴木一 2011)、古墳時代前期から連続する伝統的な集団構造の表現と評価できるだろう。5世紀後葉以降に発達する初期群集墳の多くは、この基本単位を中心にして、小規模な円墳などがさらに付随して築かれ、一つの古墳群を形成している。

先述のとおり、淡輪系埴輪Ⅱ類は小型の前方後円墳に採用される事例が圧倒的に多く、類似した階層の有力集団が古墳造営を相次いではじめたことを伝えている。造営主体の多くは5世紀後葉に新たに前方後円墳を築造した新興勢力といえるが、従前の首長墓階層の原則に従って古墳群を形成している点で、伝統的な枠組みとも大きくかかわっている。しかし、この段階の古墳群には、それまでにみられなかった新たな様相も数多く見出せる。以下にその具体像を示しておこう。

埴輪の有無 淡輪系埴輪を採用する古墳は、前方後円墳 (帆立貝形を含む) に限定されており、円墳などの小古墳には樹立されない傾向が顕著である。前方後円墳に付随する円墳は、墳形だけでなく、埴輪の有無という点で明確な階層差が表現されている (Fig.76)。

葺石の不採用 淡輪系埴輪Ⅱ類を採用する古墳は葺石を持たないという点でも共通性が高い。遠江においては、葺石は5世紀末葉まで存続するが、小型方墳などに残存する傾向がある。淡輪系埴輪を囲繞する古墳には、新たな墳墓の外観を示す積極的な志向性を読み取ることも許されよう。葺石の不採用はそれまでの首長墓にみられなかった古墳造営工程の変革といえ、形象埴輪を含む埴輪を並べることに外観の主眼が移ったこととも関連があると評価できる。

人物・動物埴輪 豊富な形象埴輪の採用はこの時期の古墳群の最大の特徴である。その詳細は先述したとおりであるが、淡輪系形象埴輪は斉一性が高く、葬送儀礼において実施された祭祀の共通性も合わせて伝えている。古墳造営活動の主体は土木工事とともに、埴輪製作が大きな比重を占めており、葺石の不採用とあいまって、埴輪製作工人は造墓活動そのものに対する影響力を増してい

たとえられる。

前方部外周の祭祀空間 二子塚古墳、郷ヶ平3号墳、辺田平1号墳といった淡輪系埴輪を採用する前方後円墳の周溝には、前方部の一方の隅が突出するという形態上の類似性が指摘できる。郷ヶ平3号墳においては、この突出部の近くで、碎片化した須恵器がまとまって出土しており（SX01）、須恵器を破碎する儀礼が行われたことがうかがえる。突出部をもつ周溝形態は前方部外周における祭祀空間の存在を示唆するものであり、3古墳の類似は、共通した祭祀様式の発露と解釈することも許されよう。周溝の形態から想定できる祭祀空間については、良好な検出例を加えて慎重に議論を進める必要があるが、葺石をもたない墳丘の特徴や、斉一性の高い埴輪とともに、「淡輪系遠江型前方後円墳」と呼べる共通した墳墓属性として把握できる可能性を示しておきたい。

小型前方後円墳の被葬者 淡輪系埴輪を採用する小型前方後円墳には一之宮古墳や辺田平1号墳など、特徴的な立地環境から被葬者像が示せる事例がある。その具体像について触れておこう。

一ノ宮古墳は、須恵器生産の拠点である湖西窯の中核に築造されている。墳形は不明な点が多いが、全長20m程度の小型の前方後円墳と考えられる。古墳の築造時期は、明通り窯といった湖西窯の中でも最古級の窯の構築時期（TK23型式期）と重なる。湖西地域には先行する首長墓系譜がみられないことから、この古墳の被葬者は遠江における須恵器生産の開始にあたり、主導的な役割を担った人物と考えられる。

いっぽう、辺田平1号墳は、隣接地に渡来系集団の墳墓群とみられる二本ヶ谷積石塚群が展開している。辺田平古墳群の埋葬施設には、二本ヶ谷積石塚群との関連がうかがえるものがあり、渡来系集団との密接な関係が看取できる。辺田平古墳群の中には、渡来人の系譜をひく人物が葬られている可能性が高い。こうした特徴から判断して、古墳群の中心をなす辺田平1号墳の被葬者は、渡来系集団を束ねた有力階層と捉えてよいだろう。

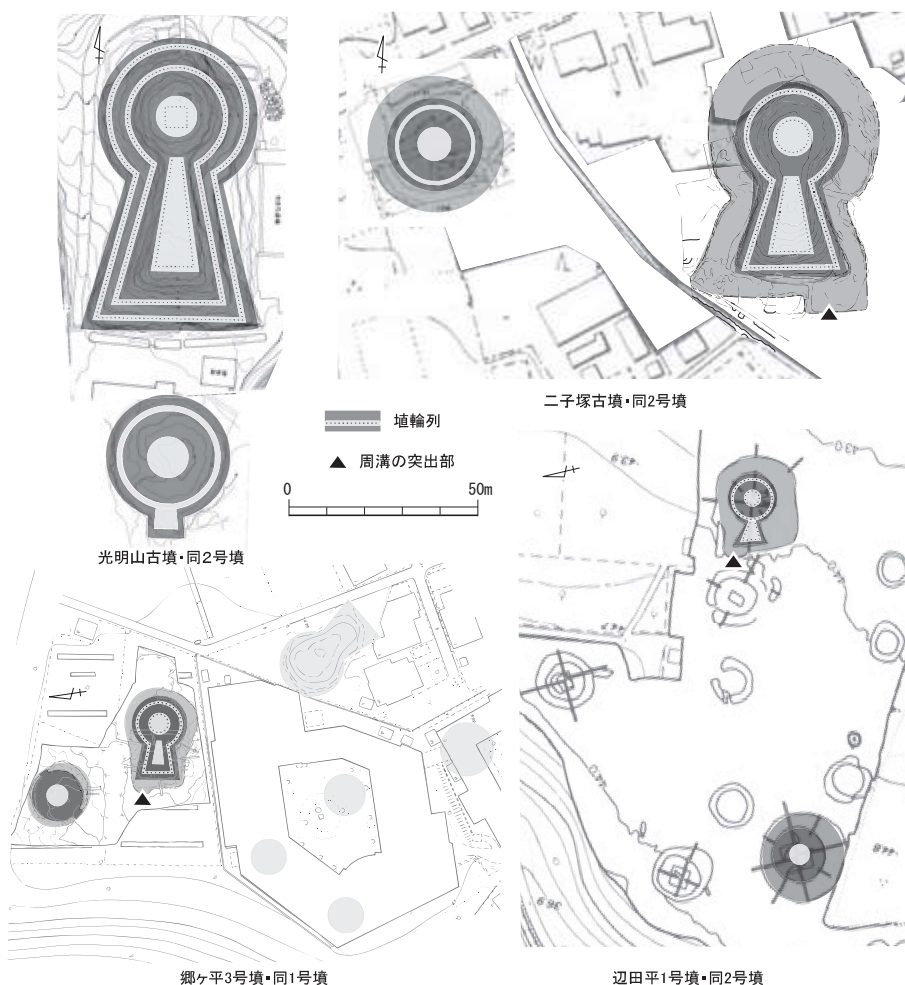


Fig.76 淡輪系埴輪を採用する前方後円墳と円墳の関係

(3) 都田川流域における首長系譜

小地域と首長墓 郷ヶ平古墳群が造営される都田川流域は、浜名湖に至る河川が貫く小盆地が連続し、地形的に完結性が高い地域である。この地は、律令制下における「引佐郡」に相当し、『和名類聚抄』の記載から平安時代には、渭伊郷、伊福郷、刑部郷、京田郷の4郷があったことが知られる。この4郷は、現在の都田川流域の小地域との対応が可能であり、渭伊郷：井伊谷川流域（北区引佐町井伊谷）、伊福郷：浜名湖沿岸地域（北区細江町気賀）、刑部郷：都田川下流域（北区細江町中川）、京田郷：都田川中流域（北区都田町）に相当するとみてほぼ間違いはない（辰巳 1994）。引佐郡下の郷名については、古代史の観点から、それぞれ説得力が高い由来が指摘されている⁽¹⁾。

この地域には、全長 50m 規模の前方後円（方）墳が古墳時代前期から中期にかけて連綿と構築されている（辰巳 2006）。都田川流域全体を統括する最有力首長は全長 50m 級の前方後円（方）墳を構築したことがうかがえる。いっぽう、郷ヶ平3号墳、同4号墳、陣内平1号墳といった小型前方後円墳は、同じ墳形を採用しながらも、全長 20m 級の規模にとどまる。複数の古墳が同時期に築かれたとみられることを合わせて考えると、その影響力が及んだのは律令制下の「郷（サト）」に相当する小地域とみてよいだろう。以下、これら小地域ごとに首長系譜と集落などの特徴をまとめておきたい。

小地域の特徴 井伊谷川流域の井伊谷盆地（渭伊郷）は、前期古墳の北岡大塚古墳から馬場平古

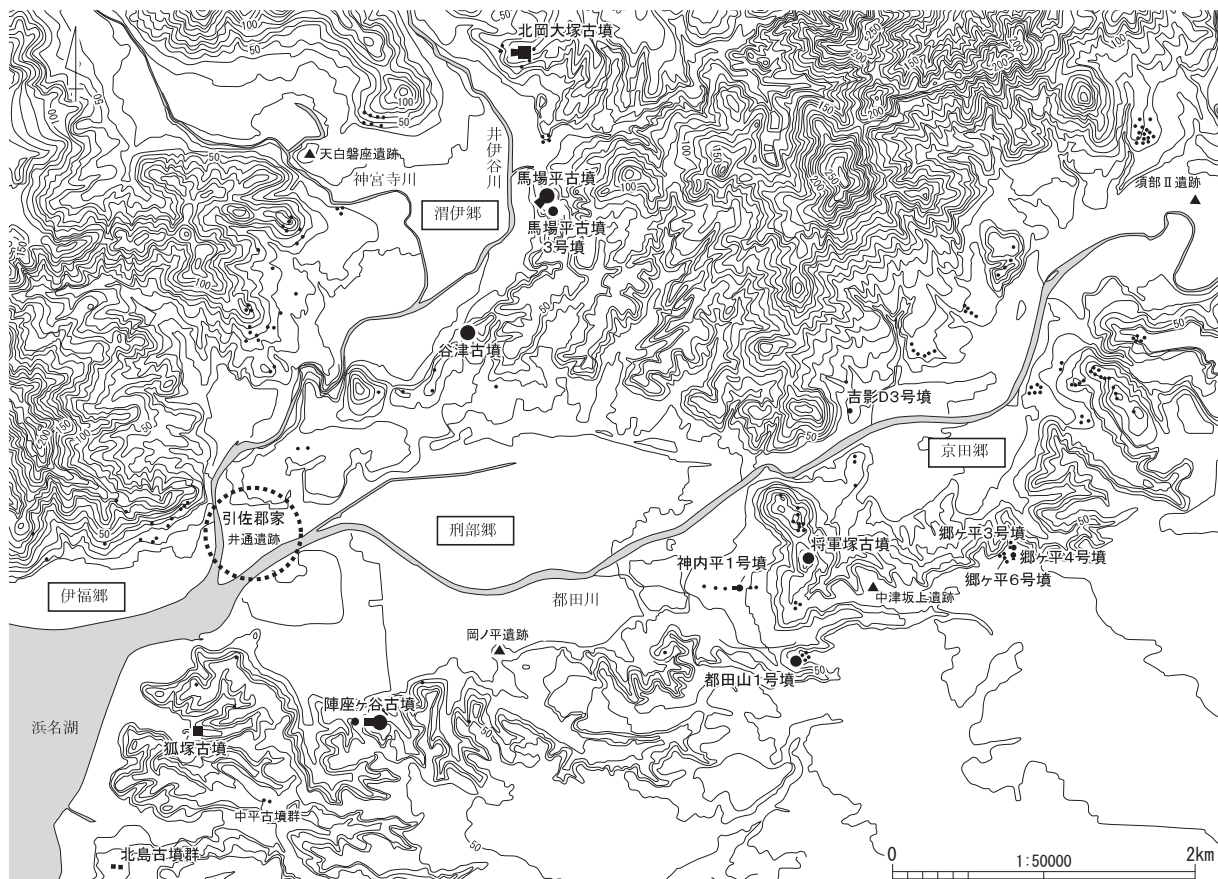


Fig.77 都田川流域における古墳の分布と奈良時代の地域単位

墳に至る首長墓が築造された地である。5世紀代には磐座祭祀が執り行われた天白磐座遺跡も知られ、首長系譜発祥の地として、この地域の精神的支柱としての役割を担っていたとみられる。

浜名湖沿岸地域（伊福郷）には前方後円墳の造営が知られないが、古墳時代中期に方墳が集中する傾向があり、特異な小地域性が認められる。その嚆矢となる狐塚古墳は当地域ではじめて埴輪を採用した古墳であり、短甲を副葬するなど被葬者には武官的な性格が濃厚にうかがえる。

都田川下流域（刑部郷）は、平野が最も発達した地域である。この地には、都田山1号墳といった、中規模の円墳がみられるが、その築造時期は明確になしえない。中期後葉には、当地域最後の最有力首長墓である陣座ヶ谷古墳が築かれている。この古墳は平野部を広域に見渡せる高台に位置し、後に引佐郡家が立地する井通遺跡をはじめ、肥沃な耕作地を望むことができる。律令制下に中心地となる地域を意識した古墳の立地からは、郡内全域を貫く地域秩序の成立がうかがえよう。

郷ヶ平古墳群が構築された都田川中流域（京田郷）においては中期後葉以降に古墳の築造が活発になる。この地域の5世紀代には、渡来系鉄器である鑄造鉄斧の出土（須部Ⅱ遺跡、浜文協ほか2000）が知られ、機織具等の土製模造品を用いた新来の祭祀が執行された中津坂上遺跡も近隣地にある。また、6世紀前半には古式の横穴式石室に外来系馬具を副葬する吉影D3号墳が築かれるなど、渡来系文物の移入が積極的に行われた地域と評価できる。

郷ヶ平古墳群の構造 こうした革新的な地域に築かれた郷ヶ平古墳群は20m級の小型前方後円墳である3号墳（5世紀後葉、TK23型式期）と4号墳（6世紀前葉、TK10型式期）を中心に形成

されている⁽²⁾。この2基は、隣接して構築されているのみならず、墳丘規模が近似し、ともに埴輪を採用するなど、類似した様相が多く看取できる。二世代にわたる首長層の造墓が継続して行われたとみてよいだろう。なお、この2基に採用される埴輪は淡輪系と尾張系で異なっているが、築造時期における技術系統の差と捉えてよい。

前方後円墳の周囲に展開する円墳についても、1号墳は3号墳と組み合う被葬者間の関係を指摘した。5～8号墳については不明な点が残るが、4号墳に近接した築造時期が想定できる。先行して構築された3号墳の前方部周溝外周（SX01）において、4号墳の築造時に祭祀が行われている点も見逃せない。都田川中流域を本拠地とした小集団がかかわる祖霊祭祀的な様相をうかがうことができよう。

また、この2基の前方後円墳の祭祀には、陶器系（湖西窯を含む在地窯産）須恵器と在地系（有玉窯産）須恵器の双方が用いられた点も興味深い。手工業生産物として、系統が異なる地元産須恵器を意識的に揃えた可能性が考えられる。郷ヶ平古墳群の造営集団は、湖西窯から有玉窯を含む範囲に強い交流網をもっていたことがうかがえる。

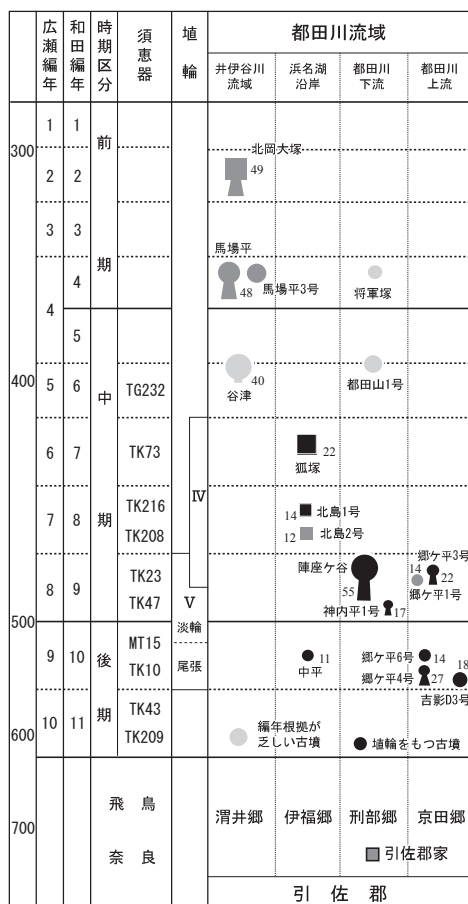


Fig.78 都田川流域における首長墓の推移